

日本語における 認知過程の変化の可能性

- 万葉集には独特の語法がある。
- 佐竹昭広(1980)『万葉集抜書』岩波書店
- 「みゆ」
- さ夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞ゆる空を月渡る見ゆ
- When I looked up, I saw a bird flying.
- *When I looked up, a bird was flying.
- 上を見上げると鳥が飛んでいた。

-
- 「われ」の明示
 - 心ゆも**我**は思はずき山川も隔たらんなくにかく恋ひむとは(万葉集)
 - 思ひきや逢い見ぬ事をいつよりとかぞふばかりになさむものとは(後撰集)
 - 英語や中国語において命令文以外では**I**や**我**が明示されるが、現代日本語ではよほどのことがない限り、**私**、などの一人称が明示されない。(池上嘉彦・守屋三千代編著(2009)『自然な日本語を教えるために』 ひつじ書房)
 - 万葉集の時代には日本語は主観性が低かった可能性がある。

-
- 認知スタイルの変化と言語変化の相関は書記言語（書き言葉）が確立され、一般に広がるにしたがって、言語構造が固定化され、それ以降の認知スタイルの変化と相関しなくなる可能性もある。